

博多版「くるみ割り人形」 あらすじ

クリスマスに起きた奇跡——。
くるみ割り人形が繋ぐ、時を越えた愛の物語。

《第1幕》

1970年代のクリスマス。博多人形師一家の娘・くらは、パーティの最中、名付け親でもある伯父の人形師・源から、くるみ割り人形を譲り受ける。これは、源が30年前、パリへ留学していた時に想いを寄せていた女性・エレーヌの一家に代々受け継がれてきたもので、彼女から別れ際に贈られた大切な人形だった。自分が思うような博多人形を作れないのは、エレーヌへの想いを未だに断ち切れずにいるからではないかと考え、彼女のことを思い出させるこの人形を何度も捨てようとしたが、それがずっとできずにいた。

一目見た時から、このくるみ割り人形と心が通じ合っているような気がしてならなかったくらはとても喜んだが、弟の匡史朗と取り合いになってしまい、落とした拍子に人形が壊れてしまう。すると、人形の仕掛けが開き、中から1枚の紙が出てくる。それは、30年間読まれることのなかった、エレーヌからの手紙だった。

夜。12時の鐘の音と共にネズミの大群が現れ、あたりの様子が一変する。ネズミ達は戸惑うくららに襲いかかると、ネズミの王様も登場して気分が高揚してくる。

そこへ兵隊達とくるみ割り人形が現れ、ネズミ軍と兵隊軍の激しい戦闘が始まる。最後は大将同士の一騎打ちとなり、くるみ割り人形が負けてしまいそうになった時、くららがネズミの王様にしゃもじを投げつけ、ネズミ達を退散させる。

動かなくなったくるみ割り人形を前に泣いているクララのところへ、源がやってくる。源が直してあげると、くるみ割り人形は再び動き出し、2人をエレーヌのもとへ案内すると言う。

美しい雪の国を通り抜けて、くるみ割り人形が導く奇跡の旅が始まった。

《第2幕》

人形作りに没頭する源の姿。何をすべきか全て知っているかのように、手が迷うことなく動いていく。必死に閉じ込めようとしていたものと、源は今まっすぐに向き合い、エレーヌの面影と自分の心を、博多人形に託していく。

源の頭上には、満天の星空が広がっていた——。

......*...*...*

源・くらら・くるみ割り人形の3人は、月の船に乗って星が輝く夜空を渡っていたが遭難してしまい、とある島に流れ着く。

倒れている源のもとにネズミがやってきて、エレーヌからの手紙を持ち去ってしまう。それに気付いた源は、くららとくるみ割り人形と一緒にネズミを追いかける。

3人は大切な手紙を取り戻し、エレーヌのもとへ辿り着けるのか。

源の想いは届くのか。そしてエレーヌの想いは…。

......*...*...*

くるみ割り人形がずっと昔から見守ってきた、いつの世にも変わらぬ人が人を想う心。

夢か現か、それとも幻か。クリスマスに起きた奇跡とその結末。

最後までごゆっくりご覧ください。